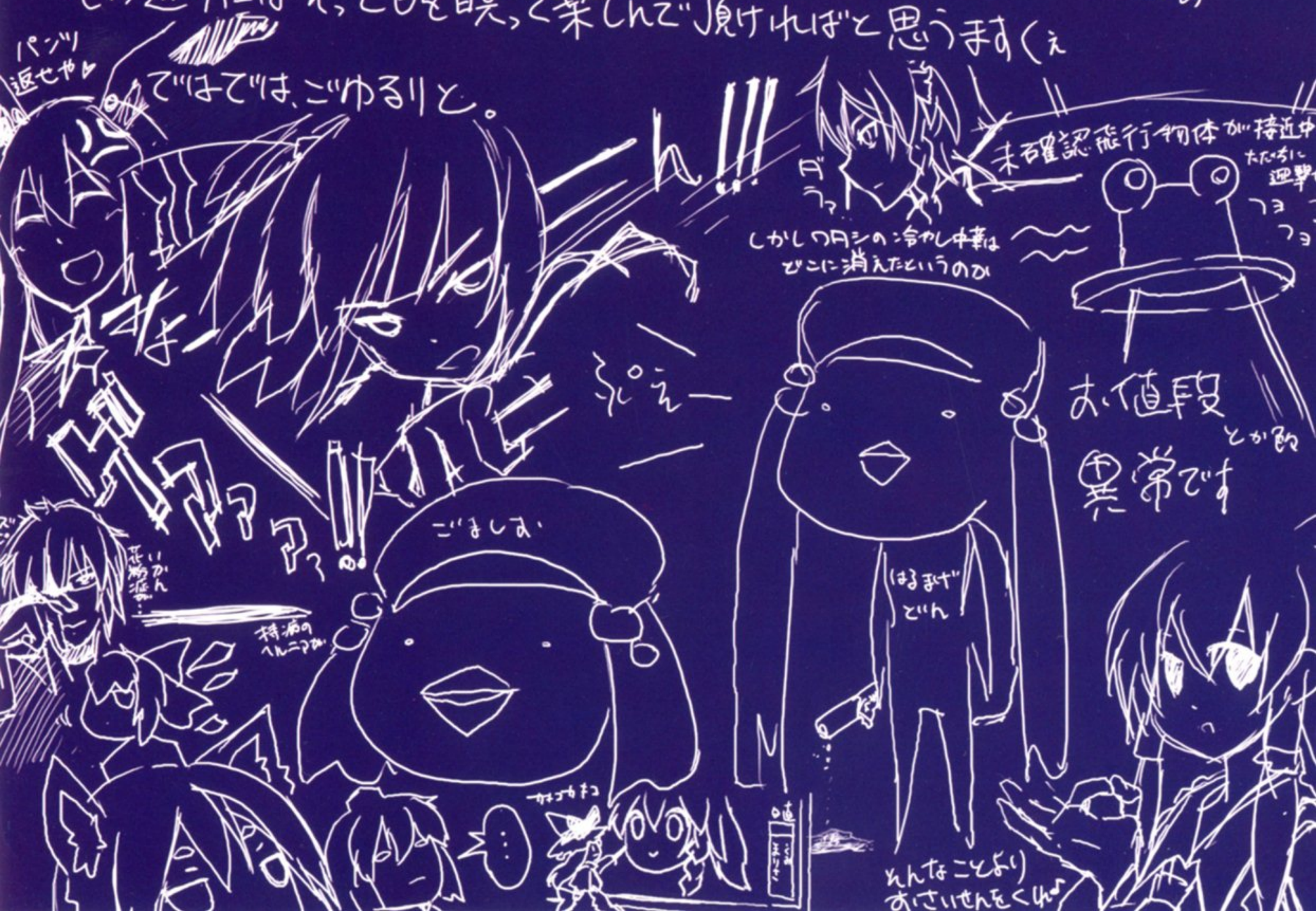
東方
妖恋談
弐
R-18

・前書きという名の無法地帯

どうもこんにちは、eroです。間違えました会帆です。
後書きの人数が増えたので私は前の方にやってきました
どうでもいいですね。
今回四季ノ香さんが挿絵を担当するお話と、私の担当するのとで一冊となっております。会帆:表紙〜17P　四季さん:18P〜23P
です。
所で、この本一応R-18になってますが、R-18なのは私担当のだけです
おまけにそれらしき絵は申し訳程度にしか挿入っておりませんので
あらかじめご留意頂けますと幸いですます(´・ω・　)
ってか、毎ページ霖え助入れたのは、後になってから考えるとうっとおしくなっちゃったなぁ…とか、全体のカラーが茶色くなりすぎだったりだとか、もうページ毎にキャラが別人だなetc……反省点が割と山盛りでありますが、まあ
その辺りにはそっと目を瞑って楽しんで頂ければと思うますくぇ
ではでは、ごゆるりと。



『東方妖恋談　弐』

僕が生まれて、既に百年以上の時が経過している。様々な人と出会い、そして別れ、そんなふうにして今に至るが、こんな感情は初めてであった。こんなのは自分らしくないとは思うものの、里の人や子供たちに信頼されている、優しくて、美しくて、明るい彼女の姿を見ると、どうしても態度がよそよそしくなってしまう。これが一体どういう事なのか、僕にはわからない……。

「お惚気」

「お、お惚気って……」

山の上の巫女に言われた一言。ちょっとした不手際で彼女の写真（山の天狗から譲り受けた一枚）を見られ、経緯を話す羽目になってしまったのだが……。開口一番にお惚気はないだろう。早苗はその緑色の髪を掻き上げると、輝いた目で迫ってきた。

「つまり、それは愛ですよ!!」

「愛……？」

「そうですよ！　慧音さんと一緒に過ごすうちに抱いた感情、火照った身体、迸るパトス!!　霖之助さん、あなた慧音さんに恋心抱いていますよ!!」

……何なんだろう、この変な口調は。なんて思いながら霖之助は溜息を吐いた。しかし……恋心か……そう思うと、なんだか段々恥ずかしくなってきたぞ。やばい、顔が赤くなっていくのがわかる。そんな霖之助の反応に、早苗はにやにやとした表情になる

「あーっ!!　霖之助さん顔が赤くなってますよ!!　照れてる照れてる、可愛い―!!」

「ち、茶化すな!!　ほら、買うものが決まったなら早く出す!!」

早苗は嬉々としながら『扇風機』を買っていった。なんでも、例の地底の核融合炉の力で生まれた電気を試す為のものだという。ここにある様々な品が、その技術を取り入れることで実用的になるらしい。それは霖之助にとってはとても興味深い事だった。

「んしょっと。それじゃあ、私はこれで失礼しますね」

「ああ、今後ともごひいきに」

早苗は扇風機を抱えると店の扉を開け、そこでこちらへと振り返り、

「霖之助さん、頑張って!!」

ウインクをして、店から出ていった。何を頑張れというのだろうか……。

「……はぁ」

霖之助は深々と椅子に座り、例の写真を取り出した。天狗の新聞記者が撮った、逞しいほどの笑顔を浮かべた女性、上白沢 慧音である。

「……」

正直、自分が人を好きになるなんて思ってもみなかった。朱鷺子には好きな人がいるからと出まかせを言ったのだが、まさか本当の事になろうとは……。普段から道具に囲まれて生活し、これじゃあ女性を好きになるなんてあり得ないと思っていたのに、まさか気付いていないだけだったなんて……。

「どういう顔をすればいいんだろうな……」

霖之助は複雑な表情で写真を見つめ、

「おじゃまするよー……」

いきなり聞こえた声にビクンと跳ね上がる。あわてて写真を机の引出しに仕舞い、その声のする方向を向いた。
「り、霖之助さん……こ、こんにちは……」
そこにいたのは、紛れもない慧音本人だった。何やら恥ずかしそうに顔をほんのりと赤く染めながら、店の入り口に佇み、右手を挙げて会釈している。その姿を見た霖之助もまた、ぽかんとした表情になりながらも会釈し返した。
「い、いらっしゃい。好きなだけ見ていくといいよ」

『つまり、それは愛ですよ!!』

意識すると余計に恥ずかしくて、態度に表れてしまう。彼女に不審がられているのではなかろうか……。考えれば考えるほど混乱していく霖之助は、慧音のいつもとは違う態度に気付く事はなかった。
「いや、いい。今日は霖之助さんに話があって来た」
「僕にかい……？」
慧音はうなずくと、何やら緊張した面持ちで両手を太股で挟みながら、霖之助と向き合うようにして座った。

「私達が出会ってさ、どれくらい経ったのかな……」
「ん、ああ……。三十年ぐらい……かな」
「うん。霖之助さんが人間から私を守ってくれた……。もっとも、あの時の私は子供くらいの身長で、中身もまだ子供だったけれど」
慧音は照れ臭そうに笑い、霖之助は口元でほほ笑んだ。元々人間だった彼女は、満月になると白沢へと姿を変えるワーハクタクとなってしまった時、人間からの迫害を受けていた。そんな彼女を守ったのが、まだ道具屋を営む前の霖之助だった。
「あの時は嬉しかったなぁ……。泣いている私の頭をなでて君は僕が守るよって言われた時、ああ、私の事を守ってくれる人もいるんだ、私はまだ必要ない存在じゃないんだって思えたんだ」
「今では君が皆にとって必要な存在だ。君も成長したんだな……」
そんな成長した慧音に抱いていた感情が、まさか恋心だったとは……。霖之助は慧音の顔を直視出来ず、軽く目をそらした。
「そうさ……あの時から、私はずっと成長したんだ……」
慧音は立ち上がると、霖之助との間にあるカウンターに身を乗り出した。そして、霖之助が慧音の行動に疑問を抱く前に、唇が慧音によって塞がれた。
「……!?」
「んっ……」
何が起きたのか分からずに混乱する霖之助。そんな霖之助をよそに、慧音は目を閉じながら舌を絡めるように口付けを続けた。数秒間それを続けていた慧音はそっと顔を離すと、俯きながら顔を真っ赤にした。
「……そ、そういうことだ、じゃあな!!」
そう言い残し、慧音は逃げるように店を後にした。店の中には呆けた店主が一人、頬をかきながら店の扉を見つめていた。

「……ふぁぁ……。眠い」
翌日、醒め止まぬ興奮と驚きで一睡も出来なかった霖之助は、欠伸をしながら店を開いた。客が来ないようならいっそ居眠りしてしまうのもいいかもしれないと思いながら、棚の整理をしている時である。香霖堂の扉が勢い良く開かれ、壁に叩き付けられた。
「いらっしゃ……っ!?」
霖之助が振り向こうとした時、いきなり肩をどんと押され、霖之助は床に倒れた。背中と後頭部に走る痛み、霖之助は後頭部を押さえながら上半身を起こし、そして見た。
「君は……前に慧音と一緒にいた……」
藤原　妹紅。永遠に死なない不死鳥の如き人間。白い長髪に赤いモンペとサスペンダーが印象的な少女（とは言っても、既に千年以上は生きながらえているのだが）が、こちらを見下ろしていた。と思うと、霖之助の腰の部分にぺたんと座りこみ、霖之助と対等の目線になって霖之助を睨んだ。
「えっと……何か？」
「じぃー……」

「……？」
「慧音が……お前の事が好きだって言うのは本当か？」
霖之助の表情には『この人は何を言っているんだ？』という感情が簡単に見てとれる。顔に出ている。非常にわかりやすい。
「ど、どうなのか……な。直接に好きだとは言われていないけれども……。って、何でそんな事を言わなきゃ」
ならんのだ。そう言い返すはずだった。だが、その言葉は容易に塞がれてしまった。妹紅が両腕を霖之助の後ろに回し、抱き寄せる様にしてキスをしたからだ。妹紅とはそんなに接点が無かっただけに、霖之助は本当に驚いた。
「んんっ、ちゅぱ……はむっ、んー……」
歯と歯の間を割って、妹紅の舌が霖之助の中に侵入してくる。舌を無理矢理に絡められて、その蕩ける様な舌使いに霖之助は頭の中が蕩けそうになるのを必死に堪えた。やがて妹紅はそっと顔を離し、二人の口の間を糸が伝った。妹紅は紅潮した顔で懇願するように霖之助を見つめた。

!?
ちゅっ

「今後一切、慧音とは拘わらないで」
「……何を言っているんだ？」
「そのままの意味よ。慧音があなたみたいな人の所為で駄目な女になってしまうのが私は嫌なの。彼女は数少ない私の理解者……私の友人なのよ。だから、お願いだからこれ以上彼女と拘わらないで……」
そう言うと、妹紅は再び唇を重ねてきた。今度は軽く、まるで霖之助の発言を止めるかのように。
「代わりに……私が相手になるから……」
「え？」

言うより早く、妹紅は立ち上がると、サスペンダーをずらし、モンペを下ろした。白く細い素足が露わになり、ワイシャツの裾から下着が覗く。妹紅はワイシャツのボタンを全部外し、さらに下着も脱ぐと、再びさっきと同じ位置にぺたんと座り込んだ。
「も、妹紅……さん？」
「慧音の為なら……覚悟は出来てる……」
妹紅は霖之助の上半身を床に倒すと、無理矢理に霖之助のズボンを外しにかかった。霖之助も抵抗しようとはするものの、マウントポジションを妹紅に取られている為に抵抗らしい抵抗も出来なかった。やがて、ズボンと下着が取り払われると、霖之助の硬くなった肉棒が妹紅の視界に入った。妹紅は一瞬その大きさに驚くが、マウントポジションから降り、その肉棒を両手で包みこむように持つと、おそるおそる先端を口に含んだ。
「ん……じゅる、ちゅぱ……んんっ、ふふ、びくびくしてる……」
「くっ、やめるんだ……妹紅……」
肉棒に吸いつかれ、快感が全身を伝う。妹紅の舌使いは柔らかく繊細で、口内は程よく湿っていて温かかった。霖之助は今にも射精してしまいそうな気持ちよさに身体を震わせた、
「んん、ちゅ……っはぁ、あむ……」
妹紅は促すように先端を舐め続けながら、竿を右手でさすって刺激した。心地よい快楽に呑まれ、霖之助の肉棒が妹紅の口の中でビクンと跳ね上がる。妹紅はそれを押さえつけるかのように、より一層激しく吸いついた。
「んっ、ちゅぷ……んむっ、ちる……。じゅる……んんっ……、どう、きもひいいれしょ？」
妹紅は上目づかいに霖之助を見つめながら、目の前の肉棒を舐めまわした。唾液で滑りが良くなった肉棒を、手で扱きながら舐めると、いよいよ限界に達したのか、霖之助は妹紅の頭を掴んで無意識のうちに肉棒を奥まで咥え込ませた。先端が喉の奥に当たっており、妹紅は嗚咽とともに眼頭に涙を浮かべながら、その肉棒に吸い付き、締め付けた。
「妹紅……だめだ、出る……!!」
「んっ、出して……じゅるぅ、口の中、霖之助の精液で満たして……ちゅぷ……」
妹紅が一際強く肉棒を口の中で締め付け、それを引き金に霖之助は限界点を超えた。大量の精液が妹紅の口の中に溢れ、喉に直接流し込まれる。それでも飲みきれない精液が口から溢れ、妹紅の口の中はみるみる霖之助の精液で満たされた。
「むぐぅ!?　んんっ、んんんんんー!!」
妹紅は肉棒から口を離すと、口の端から少しばかりの精液を垂らしたまま、ゆっくりと口の中に溢れた精液を飲み干した。
「んぐっ、んんっ……こくん、ッはぁ!! っはぁ……はぁ……」
妹紅はとろんとした表情で息をつくと、上目づかいに霖之助を見た。霖之助はしかし、どういった反応をすればいいのか分からずに妹紅を見つめていた。そのまましばらく沈黙が続き、それを破ったのは霖之助だった。
「えっと……すまない」
「どうして謝るんだ？　私がした事だ。それに、覚悟は出来ている」
妹紅は歯を出して笑いながらそう言った。
「……君の覚悟っていうのは、一体何なんだ……？」
妹紅はゆっくりと身体を起き上がらせると、霖之助の肉棒を右手で支え、そっと肉棒の先端を自分の秘部に添えた。妹紅の表情は決意に満ちていた。

ぐっ
!!
ガシッ
ゴブッ
ゴプッ
ビュルルッ

「……慧音の為なら、なんだってする覚悟だ」
そして、その身体をすとんと落とした。肉棒は妹紅の割れ目を貫き、悲鳴が店の中に木霊した。
「ひぐっ……うあああぁぁぁぁぁぁぁ!! っはぁ!! うあぁぁぁ……」
「……!! 妹紅、まさか!!」
見ると、妹紅の秘部からは血が滴り落ちていた。妹紅は涙を流しながら霖之助の服にしがみ付き、その痛みに耐えた。
「っ、馬鹿!! どうして、こんな事を!!」
「……これが……ひぐっ、私の覚悟の、表れだから……くっ!!」
霖之助は妹紅を強く抱きしめ、その背中をさすった。血は止まったが、それでもまだ痛みは引かず、妹紅は霖之助の胸板に顔を埋めながら嗚咽を漏らした。そのまま、妹紅の痛みが少しでも引くのを待ちながら、霖之助は複雑な表情で妹紅を抱きしめ続けた。
「……ん、ありがとう。だいぶ痛みも引いてきた……。……かっこ悪い姿を見せちゃったな……」
「いや、そんなことはない。他人の為にそこまで自分を犠牲に出来るんだ。大したものだよ」
「……そうか」
妹紅は恥ずかしそうに頬を赤らめ、ギュッと霖之助の服をつかんだ。
「……さて、いつまでもこうしているのもあれだし……。ゆっくり抜くぞ」
「あっ、それはだめだ!!」
妹紅は懇願するような眼で霖之助を見つめた。『どうして?』といった表情の霖之助に、妹紅は言った。
「これは私の覚悟だ。最後までやり遂げる……。それに、霖之助にも申し訳ない」
「僕の事はどうだっていいんだ。それよりも心配なのは妹紅、君の身体だよ」
「ははっ、心配するなよ。私は不死身なのよ? これくらい、大したことないわ」
心配そうな顔をする霖之助に、妹紅は微笑んで見せた。そして、そっと身体を動かす体制に持っていくと、顔を赤らめながら霖之助を一直線に見つめた。
「それに、実は少しだけ……その、疼いて仕方ないの……。だから、お願い……続けさせて……」
「……はぁ、覚悟の表れなんじゃなかったのか?」
「それはそれ、これはこれよ」
妹紅は微笑むと、ゆっくりとその腰を上げた。肉棒が膣内からゆっくりと現れ、そして妹紅が腰を落とすと深くに突き刺さった。まだ少し残る痛みに、時折涙を浮かべながら妹紅は腰を動かし続けた。痛みと快楽の混ざりあった奇妙な感覚に、段々と吐息も荒くなってくる。
「んぁっ、い、痛いのに……気持ちいい……!! なにこれ……止まらないぃっ!!」
妹紅の膣内は段々と愛液で濡れ始め、滑りも良くなってきた。店の中に水音がちゅくちゅくと響き、妹紅は身体を上下させながら、動くたびに突き抜ける快楽に全身を震わせた。
「はぁっ……はぁっ……んんっ、ふぁぁっ……!! 霖之助のおち〇ちんが……奥に、当たってぇ……!!」
妹紅の艶めかしい喘ぎ声に、わかってはいても霖之助は自然と腰を動かしていた。
。やがて、妹紅が上下に動くのから、妹紅の膣内を霖之助が下から突き上げる形となっていた。
「ひぅ……あぁぁん!! やぁっ……あっ、ふぁぁ!! 中がごりごりってなって……いやぁ、気持ち、いいのっ……!!」
だらしなく開いた妹紅の口から涎が垂れ、突き上げられる度に喘ぎ声が漏れ出した。さっきまであんなに痛かったのが……こんなに気持ち良くなってる……。太くて大きいのが私の中をかき回して、それがたまらなく気持ちいい……。あは、もしかしたら汚れてしまっているのは私なのかもしれない。いや、それはとっくの昔からそうか……。
「もっとぉ!! 激しく……私を犯してぇ……!! ああっ、ふぁ、くぅぅっ……んんっ!!」
霖之助が動くのに合わせる様に、妹紅も全身を動かした。快感に膝ががくがくと震え、膣内の肉壁が霖之助の肉棒を締め付け、さらに快感が増す。二人は互いに迫りつつある限界を感じながら、快感を貪りあった。

ぺろ
ぺろぺろ…
ぐい
ぎゅっ

「も……こう、ぼちぼち……出そうなんだが……」
「あっ、はぁっ……!! んっ、出してっ!! 私の中に……ああっ、ふぁぁぁ!! うっ、私も……だめっ……!! ああっ、あああぁぁぁぁん!!」
限界を超え、妹紅は絶頂に達した。絶頂の快感に妹紅は背中を反らしながら身体を震わせ、力なく霖之助に項垂れた。今までにないほどの量の愛液が吹き出し、そのたびに妹紅の身体は霖之助の上でビクンと電気が走ったかのように跳ね上がった。そして、そんな妹紅に続くかのように、霖之助も限界を超えた。肉棒の先端から大量に溢れ出る精液が、妹紅の膣内を満たした。
「あふぅ……私の中に……熱いのがいっぱい……」
霖之助の胸に顔を埋めて肩で息をする妹紅を、霖之助はそっと抱き締めた。妹紅が腰を上げて肉棒をそっと引き抜くと、割れ目から精液があふれ出し、滴り落ちた。
「はぁ……んっ、すごい……いっぱい出したんだ……。そんなに気持ちよかったのか?」
「君こそ……気持ちよさそうに喘いでいたじゃないか……」
二人はしばし見つめあうと、くすりと小さく笑い合った。

「なあ、霖之助。一つ聞かせてくれないか」
香霖堂の奥、そこは居住区になっており、そこに霖之助は住んでいる。そこにある風呂場に、妹紅の声が木霊した。妹紅は檜の浴槽の縁に掴まり、浴槽の外にいる霖之助に向かっていた。
「なんだ？」
霖之助はボディーソープをタオルにつけ、体を洗いながら返事をした。どちらとも外の世界からやってきた物で、おおよその用途は名前で理解出来たが、本格的に使うまでには早苗の助言を必要とした。妹紅はそれを物珍しそうに見ながら話した。
「これは、いわば私のわがままだ。慧音の為とはいえ、こうして私が出る幕ではないんだから……。それなのに、霖之助はどうして私の考えを受け入れたんだ？」
「……半ば強制的な気もするんだが」
「あ……あぅ……ぶくぶく」
確かにそうだった。妹紅は反論出来なくなり、湯船に口を沈めて気泡を作った。
「冗談だ。本当を言うと、僕は慧音の事を好きだし、諦めてくれなんて言われてももちろん納得なんていくはずがなかった。けれども、君の想いと覚悟を無駄にしたくないのと、慧音には本当に幸せになってほしいのとが重なったら、慧音の幸せの為にも僕が引くべきなんじゃないのかって思ったんだ」
霖之助は桶で湯船のお湯を掬い、身体の泡を流した。妹紅は笑っているのか悲しんでいるのか分からない表情で湯船に映った歪んだ自分を見ていたが、そのもやもやした思いを吹っ切るかの様にそのお湯で顔を洗った。
「それにしても、いいのかい、その髪。湯船に浸かっているじゃないか」
霖之助は妹紅の湯船に沈んだ白い長髪を指差しながら言った。妹紅はその髪を一瞥すると、肩をすくめた。
「どうせ洗う時に濡れるんだ。こんな短時間ですぐに傷みはしないだろう？」
「蓄積はされるがな……」
「五月蠅い」
左右を合わせた妹紅の手から水が一直線に霖之助に跳び、顔にかかった。
「兎に角……だ。僕は君を信用する。だからこそ、君には慧音を幸せにしてやってほしいんだ。僕が言える口じゃないのはわかっているがね。彼女が幸せでいられるのなら自分の幸せなんてどうでもいいから、だから、彼女を……」
一直線に妹紅の目を見て言う霖之助に、妹紅は頷いた。私が慧音を幸せにしなければいけないんだ。その気持ちだけが独り歩きしていた。愛は盲目。妹紅は、深く考えるのを恐れた、故に考えなかった。本当に、慧音を幸せにしてやれるのだろうか？

…？
手がしゅ…

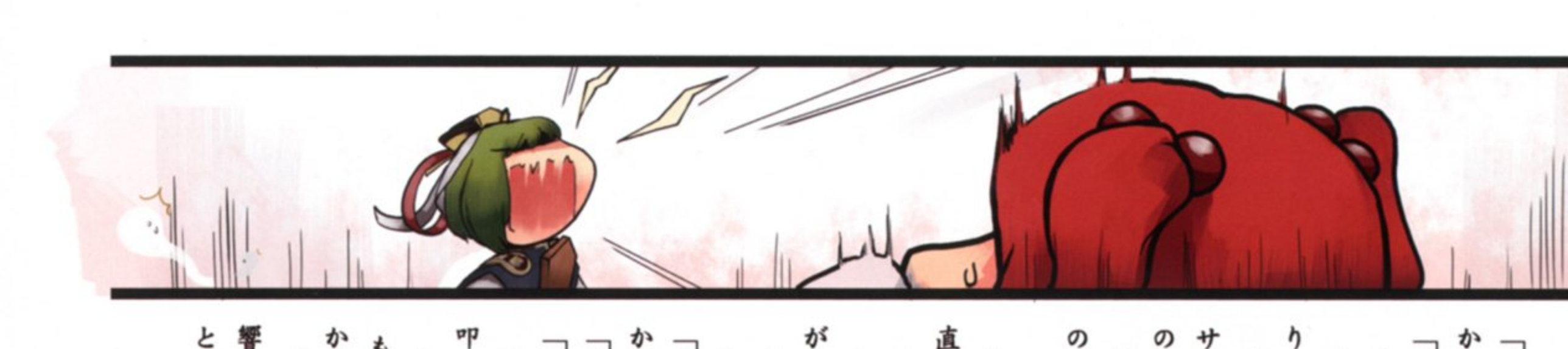
「大丈夫……絶対に慧音を幸せにするから……」
その言葉が、霖之助に向けられた言葉なのか、それとも自分自身に言い聞かせている言葉なのか。どちらにせよ、その決意は決意だけに留まったのだが。
「それじゃあ、私も洗おうかな……」
妹紅が湯船から立ち上がり、浴槽から出た。それに合わせるように霖之助が立ち上がり、しかし妹紅が霖之助を上から押さえつけてそれを塞いだ。そしてそのまま霖之助の背中にもたれかかり、背後から抱き締めた。
「すまない……少し逆上せたって言う事にしておいてくれないか……」
「どういうことだよ……」
「……しばらく、こうしていたいんだ……」
そのまま、霖之助の背中にもたれかかりながら妹紅は目を瞑った。背中に妹紅の重みを感じながら、霖之助はそのまま黙っていた。そうして時間は過ぎていき、妹紅は霖之助からそっと身体を離すと、顔を赤らめて恥ずかしそうにその場にぺたんと座りこみ、石鹸を泡立て始めた。
「あ、ありがとう……ね……」
「いや……いい」
しんと静まり返った浴室に、湯船の波立つ音だけが聞こえる。霖之助はその雰囲気を誤魔化すかのように、湯船に入って顔を洗うと、深く溜息を吐いた。やはり、慧音を諦めなければならないのは残念だし、彼女を振ることで少なくとも彼女を傷つけることになってしまうのは、やっぱり避けたい。でも、今は妹紅を信じるしかないんだ。妹紅だったら、きっと慧音を……。
「……」
妹紅は石鹸を泡立てながら、横目に霖之助をチラチラと見ていた。私は慧音が好きだ、だから彼女を守る為にも、私は霖之助に初めてを捧げたんだ。……その筈である。なのに、霖之助を見ていると、なんか変な気分になるのだ。こう、うまく言葉に出来ない……胸が、キュンってするのだ。妹紅は身体を流し、泡を洗い流すと、霖之助とともに湯船に浸かった。少しだけ、違和感がない程度に身体を寄せてみたりして、慌てて我に帰った。
「うー、ぶくぶくぶく……」
どうしてしまったのだろう……私、霖之助の事を意識し始めている……。

翌日、霖之助はカウンターに伏せて寝ていた。日差しが暖かい所為もあり、容易く睡魔に呑まれてしまったのだ。そんな店内にこっそりと顔を出したのは慧音だった。一昨日に自分がした行為に頬を染めながら、慧音は店の中をきょろきょろと見回し、カウンターに伏せて寝ている霖之助を見つけると、忍び足で近づいた。
「霖之助さん……寝ている……？」
霖之助の寝顔を覗き、慧音は微笑んだ。そして霖之助の向かいに座り、黙ったままその寝顔をじっと見つめていた。小一時間ほどが過ぎ、霖之助は小さく呻き声をあげながら目を覚ました。そして、目の前でこちらを見つめている慧音に気づくと、慌てて上半身を起こし、口もとの涎を拭いた。
「ふふ……霖之助さんってば子供みたいだな」
「う、うるさいな!! それより今日は……」

慧音は小さくうなずき、真っ直ぐに霖之助を見た。
「霖之助さんの想いを聞きに来た……。大丈夫、覚悟は出来ているから……」
慧音は緊張していた。霖之助さんが自分の事をどう思っているのか、それが知りたかった。でも、知りたくなかった。もしかしたら、今の関係が一瞬で崩壊するのかもしれない。もう二度と、霖之助さんを実の兄の様に慕う事が出来ないのかもしれない。それが、堪らなく怖かった。
「こういう時、遠まわしに言うのは好きじゃない……というより、少々苦手でね。単刀直入に言うと、慧音、君と付き合う事は出来ないんだ」
「え……？」
霖之助は言葉を続けた。
「僕も、慧音の事が好きだ。気付かなかっただけで、ずっと前から気にかけていたんだ。だから、慧音が僕の事を好きだってわかった時は嬉しかったし、慧音にキスされた時は興奮した」
「だったら……!!」
「でも、もし僕が慧音と付き合って、それで幸せになるとは限らない。むしろ、幸せにはならない気がする」
ズキン
「だったら、僕と慧音は付き合うべきではない。自分勝手だし、慧音の今の気持ちを考えていない結果だというのは十分に理解している。けれど、」
ズキン
「この決断で、後に慧音がもっともっと幸せになれるんだったら、その方がいいと思うし、ぼくはそれを望んでいる。それが、僕の気持ちだ」
ズキン……やっぱりだ、僕にはこういうのは向いていないんだ。慧音を見ると、彼女の表情は今にも崩れてしまいそうな程に不安定だった。ズキン……また、心が痛んだ。

「あ……えっと、あれ？　どうして……」
目から零れ落ちた涙を、慧音は手で拭った。こちらにそれを見せないように、顔を伏せながら。
「えへへ、おかしいよね……。覚悟は出来てたはずなのに……やっぱり、私駄目だったみたいだ。でも、よかった……霖之助さんは私のことが嫌いなんじゃない。私を好きだからこそ、私を思ってくれているからこそ、その答えを導き出してくれたんだよな……？」
だったら……どうして泣いているんだろうか。私は……霖之助さんにこんなにも想われているのに……それなのに、どうしてだろう……。
「あ、ありがと……霖之助さんの想い、聞けて、よかった……。私……すごく幸せ者だ……」
慧音は無理矢理に笑っていた。突き刺さるような痛み、今すぐにでも本当の事を言いたかった。そして、慧音は満面の笑みを浮かべて、僕もそんな彼女に微笑みかけて……。でも、そんな事出来る訳がない。
「……それじゃあ……行く、ね」
私は霖之助さんに背を向けた。これ以上、この表情を保てない。私は霖之助さんの返事も待たずに店を飛び出した。見えない。周りがどうなっているのか分からない。店を出てすぐに、私は歩く速度を緩め、森の中で立ち止まった。
「う……ひぅ、うぁぁ、あぁぁあっ……!!」
嘘。幸せなんかじゃない。どんなに霖之助さんと一緒になる事で私が不幸になったとしても、私にとって、霖之助さんと一緒にいること自体が本当の幸せなんだ。でも、それが言えなかった。言う勇気がなかった。果たして、本当に霖之助さんはそう思っているの？　わからない、私にはわからないよ……。ただ、私は霖之助さんが好きで、好きで好きで、想うと夜も眠れなくなって、会うと身体が熱くなって、話すと心が止まりそうになるくらいに、好きで仕方なくって。
「好きなの……霖之助さん……私、あなたのことが好きで好きで……だから、幸せになるとかならないとかいいから、だから……」

To be continued..



「小町!!　あなたはまたそうやって仕事をさぼるのですか!!」

「し、四季様!?　どうしてここに……」

小町は慌てて上半身を起き上がらせた。

此岸から三途の川を隔てた場所にある彼岸で小町は居眠りをしていた。

暖かな光に包まれ、辺り一面に咲き誇る花の香りが、サボり癖のついた小町をおのずと居眠りへと誘っていったのだ。

だが、もちろん彼岸で居眠りなどすれば、閻魔にばれるのは容易い事であった。

声に目を覚ました小町が見た人物は、紛れもない是非曲直庁のヤマザナドゥで小町の上司である四季映姫であった。

おかしい、どうしてばれてしまったのか。

ここなら他の幽霊たちとも紛れて、絶対にばれない自信があったというのに……。

小町の頭の中は一気に言い訳の山に埋め尽くされた。

さてどの言い訳を使おうか……。

「私にあなたと幽霊の区別が付かないとでも思ったのですか？　でしたら、あまり閻魔を舐めない方がいいですね」

「し、四季様、これには深い訳がですね……」

「問答無用!!」

映姫は手にしていた悔悟の棒で小町の脳天をぴしゃりと叩いた。

言い訳など必要なかった。

もっとも、あの言い出しではまさに言い訳らしい言い訳しか吐けなかっただろうが。

ごちんという鈍い音と共にきゃんと素っ頓狂な叫び声が響き、小町は痛そうに頭を押さえ、涙目になりながら渋々といった様子で立ち上がる。

身長の問題で、目上である筈の映姫が小町を見上げる形になってしまうのだが、それでも閻魔、威厳だけはしっかりと小町を見下ろしている。

その迫力を前にして、心なしか小町の方が小さく見える。

「小町、私があなたの上司である以上、私は決してあなたを役に立たない死神だから、などという理由で首を刎ねたりはしません。これがどういうことなのか、あなたにわかりますか？」

いきなりの質問に、小町は即答する事が出来なかった。

なんだなんだ、謎かけか？　それとも、あたいに何か伝えたいことが……？

そのまま数秒間悩み、そして出た結論が、
「あたいと離れたくないから……とか？」

「馬鹿を仰いなさい、あなたが半人前のままでその道を終えないために決まっているでしょう？　あなたが死神な以上、私はあなたに一人前の、役に立つ死神になってもらいたいのです。ですからあなたはもっと仕事に精を出しなさい!!」
出た結論は簡単に否定され、小町は半分ほど落ち込みつつも映姫の言葉に頷いた。

そしてそそくさと大鎌を担いで駆けていく小町を、映姫はどこか愁いを帯びた表情で、じっと見つめていた。
草花が風で一斉に揺れた。

終始無言の霊に一方的に話しかけながら舟を漕ぐのも、
些か飽きつつあった。
相手は返答するすべを持たないし、景色も昼夜の概念がない真っ暗闇に
ただただ霧が立ち込めるばかり。

話の内容もいよいよ尽き、小町は霊を彼岸まで渡し終えると、此岸に戻り
舟を止め、陸に降り立った。
三途の河から少し離れた、此岸と中有の道との間。
空が明るみを持ち、日が昇っているのがわかる。
涼しい風と暖かい日差し、小町はそこに青々しい葉の茂った木を見つけると、
その袂に身体を預け、そのまま瞳を閉じた。
なぁに、順番待ちの霊はもう全員運んだのだ。
この瞬間くらい、さぼっていても文句は言われまい。
そう思っていると、安心感と暖かい日差しが小町をゆっくりと眠りへ誘った。

「……」
目が、醒めた。はずなのだが、これは果たして夢だろうか。
目を覚ました小町が見たのは、寝転がっている自分の上に、胸に顔を埋
めるようにして寝ている映姫の姿であった。
待て待て待て、落ち着こう。
この状況はなんだ？
どうして目を覚ましたら『四季様がたいの上で寝ているのだ？』
「えっと……四季様？」
…返事はない、ぐっすりと熟睡なさっているようで、呼吸とともに肩が小
さく上下している。
「おーい、四季様ー」
「すー……すー……」
あ、可愛い寝息だな……って、いかん、何を考えているんだ。
この方はあたいの上司である閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥだぞ。
小町は上半身を起き上がらせる事も、立ち上がる事も出来ずそのままの
体勢で時間を過ごすしかなかった。
こんな状況では眠るに眠れない。
「こま……ち……」
「は、はいっ！？」
いきなり名前を呼ばれ、慌てて返事をする小町。
しかし、それが映姫の寝言だと気付くと安心したように溜息を吐いた。
しかし、あたいの名前を寝言で言うとは、一体四季様はどんな夢を見て
いるのだろうか……。
夢の中でも説教をされているのかと思うと、なんだか悲しくなってくる。
「小町……離れてはいけません、絶対に……」
「……へ？」
しかし、映姫の口から出てきた言葉は、小町が予想した言葉は愚か、候
補にすら入っていない言葉であった。

「私から、絶対に離れてはいけません……。この想いが届かなくてもいいから、だから、せめていつまでも一緒に……」

「四季様……」

小町は手をぎこちなく映姫の背中に回し、優しく包み込むように抱きしめた。

小さな身体はまるで仔猫を抱きしめているかのように柔らかく、温かく、ほんのりと四季様の香りが漂った。

「大丈夫です、あたいはいつでも、四季様のおそばに付いていますから……」

すると映姫の表情が、幸せそうな笑みに変わった。

小町はその表情を見て嬉しそうに、再び目を瞑った。

風が吹き、木の葉が揺れる。

空は青く、白い雲がぽつぽつと浮かんでいた。

「大好きですよ、四季様」

空の色はすっかり夕暮れ。
映姫はそっと目を開けると、その空の色を見てばっと上半身を起こした。
「ああ……やってしまった……」
映姫は落ち込んだ風に頭を手で押さえながら項れた。
少しだけ、少しだけ小町に添い寝してみたいって思っただけなのに……
熟睡してしまった。
そんなこと考える私も馬鹿なのだけれど。
まさかとは思うけれど、小町にはばれていいですよね……？
映姫は振り向き、そこで爆睡している小町を見て胸を撫で下ろす。
映姫は立ち上がると、小町の頭を悔悟の棒でぴしゃりと叩いた。
ぺちんという軽い音と共に、変叫び声をあげながら小町は目を覚まし、
目の前に立っている映姫を見て慌てて立ち上がった。
「お、おはようございます四季様!!」
「おはようございますじゃありません!!　まだ仕事時間は終わっていません!!」
小町は空が綺麗な橙色になっているのを見ると、わざとらしく驚いたそぶりを見せた。
立ち上がり、身体についた埃を手で払いのける。
「……四季様はここにいて大丈夫なんですか……？」
「私はほら、少し長めに休憩を貰いましたから」
小町の些細な疑問に、映姫はそう答えた。
人の振り見て我が振り直せ、言葉が自分に突き刺さる。
映姫は少しだけ、ほんの少しだけ小町に対して罪悪感を持ちながら、
小町に仕事に戻るように言った。
小町は慌てて三途の河へと駆けて行き、その後ろ姿を見て、映姫は深く
溜息をつく。
この身分さえ……この身分さえ無ければ、私は素直に小町に今の気持ち
を伝えられるだろうか。
直接に面と向かって、好きだと言えるだろうか……。
「……好きですよ、小町」
身分という柵に邪魔をされて、思いは伝えられないけれど。
この想いは変わらずに、いつでもあなたへと向けられている事を、どう
か、感づいてくれたら幸いです……。

「聞こえているんですけれど……ね」
「ひゃあぁぁ!?」
草原に映姫の悲鳴が木霊した。
小町はまだ映姫とはそんなに離れていない場所に立っていた。
映姫は顔を真っ赤にしながら、何かを言おうと口を動かすも、まるで金
魚のごとく開閉するのみであった。
「いや、四季様も休憩とはいえ、そろそろ戻った方がいいかなって。だっ
たら、あたいの船で一緒に行こうかなって思って、戻って
きたんですけれ……ど……」
小町は表情をニヤつかせ、映姫は諦めたように再び溜息を深くついた。
「そ、そうですか、わざわざありがとうございます。それでは、お言葉に
甘えさせていただきましょう」
なるべく冷静を装って、小町の動かす船に向かって歩く映姫の手を、
小町は掴んだ。
映姫は足を踏み出すのをやめ、小町に振り返る。

小町は、恥ずかしそうにほほ笑みながら映姫の目を真っ直ぐに見つめていた。
「あたいも好きですよ、四季様」
想いが、繋がった。
だからだろうか。
映姫は気付かなかった。
いつの間にか、目から涙が零れている事に。
それは悲しみの涙ではなく、喜びの涙という訳でもなく、ただ、どうしてか流れ出てくるものだった。
「し、四季様……？　えと、手、痛かったですか？　それとも私別に何か……」
焦った風に駆け寄ってくる小町を、映姫は制する。
「いいえ、なんでもありません。……さあ、行きましょう！　閻魔ともあろう私が、いつまでもここで油を売っている訳にはいきません!!」
「……はい」
きっとそれは、心を委ねられる相手に見せる事のできる、自分の弱みの涙なのだろう。

話：八月一日宮
画：四季ノ香

地鉱
りふぬ

例大祭の時と同じく
スペースに空きができて
しまったので、相変らず
粗いですが落描き
で埋めあわせで
ございますぐ

ぷっちゃけこの文字
邪魔とか思われた
方がおられましたら
たぶんそれは正しい
反応ですゴメンなさい
ゴメンなさいゴメンなさい
…… (((^ω^)

しかし夏の蒸し暑い時期
に朱鷺子のこの服は少々
暑くるしいかなとか思ったり
するのですが皆様どうでしょう
ただ残念ながらページ
数の関係でキャストオフの
差分は見ることができない
仕用となっております
という訳でしてここは各々
の研ぎ澄ませた
眼でもって朱鷺子
の服の下を透視
して頂ければ
と思います。
それに止まら
ず、その眼
に焼き
付けた
朱鷺子の
あられも
ない姿を
描き上げ
て私に見せ
つけて頂け
ると♡

とても嬉しいです(黙
できたらその時は脚と靴下
も是非お願いします(
…フゥ…
さてさて、何故だか結局
前書きと大差ない無法
地帯となって
しまいましたが
ここまで読んで
頂きありがと
うございいま
した。今見て
みると左
下と文字の大
きさが全然
違うんですが、もう
気にしない
気にしない

それでは、また
機会がありましたら
ノシ

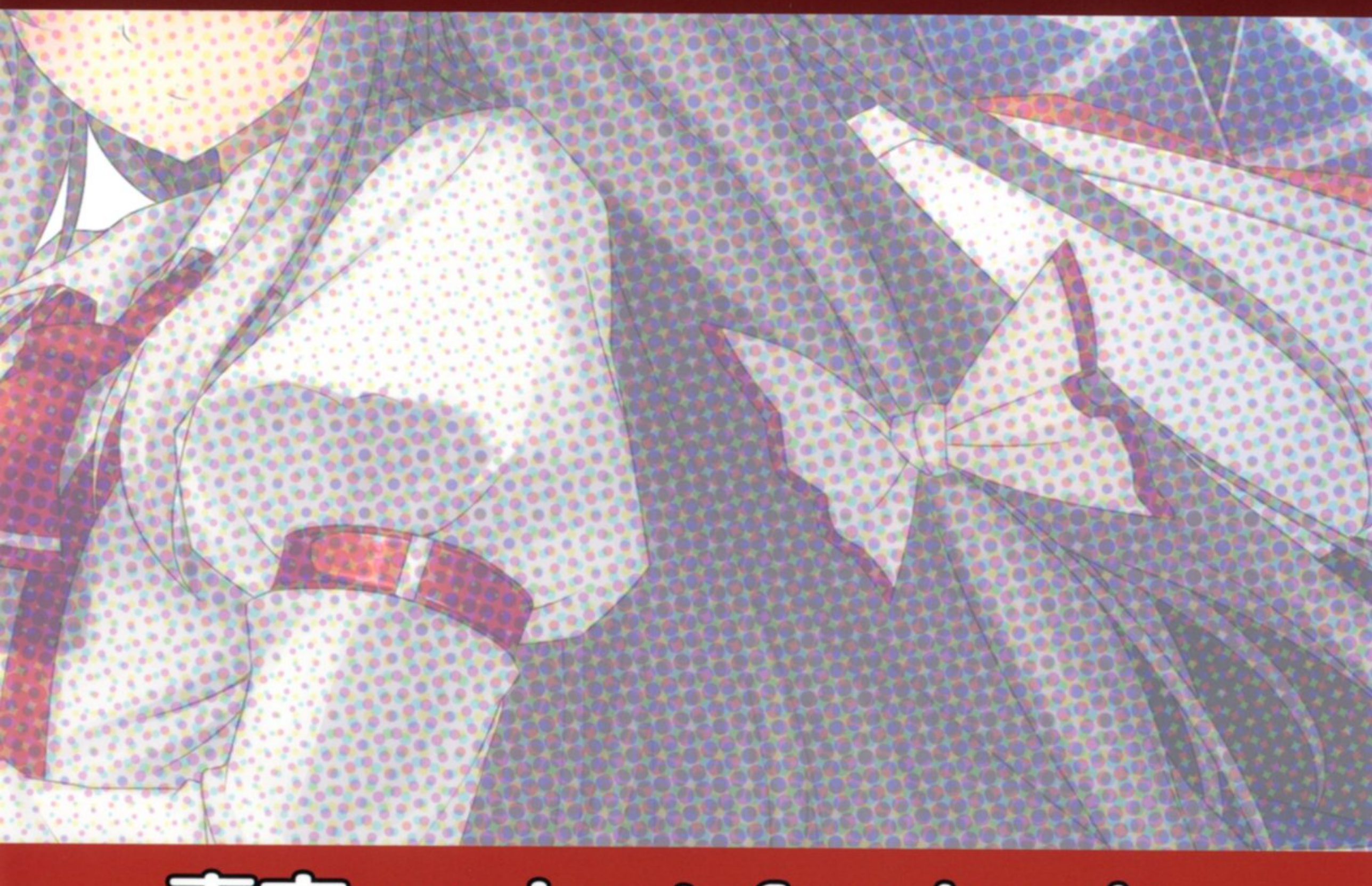
落描き朱鷺子さん

奥付

初めまして、もしくはお久しぶりでございます。知っている人も知らない人も共通して読めない名前、文章担当の八月一日宮でございます。
この度はサークル『ICBM』東方project fan book三冊目、『東方妖恋談 弐』を手に取っていただき、誠にありがとうございます。
何となしの産物であるサークルも結成して半年以上経ちまして、メンバーも増えた訳でございますが、今のままで満足せず、より一層の精進をしていきたいと堅く心に誓いつつ、会帆さん、四季ノ香さん、陰ながら支えて下さった方々、今回素晴らしいイラストを寄稿して下さった、独鈷りぷあさん（http://www.rose.ne.jp/~apricot/）、そして何より今この文章を読んでいるあなたに、心よりの感謝の気持ちを込めて。では、またお目見えする時まで。

どうも、はじめまし て。(の方が殆どだと思います…)
四季ノ香(シキノカオリ)と申します。
　数ヶ月前に加盟しつつも表にあまり出ませんでしたが、
こ の度、小町と映姫様の話に 挿絵を描かせて頂く流れとなりました。
レイアウトは自由との事だったので、ちょっと遊ばせていただきました..w
い ままでのICBMとはちょっと違った挿絵の配置ですが、こういう感じも面白いかなと。
　まだまだ未熟な私を誘ってくださった 八月一日宮さんには大変感謝していますが、
その辺のくだりは、会帆さんが書いてくださると思うのでハブきます…w
ではまた、機会がありま したら　・・・この辺のくだりもお二人に任せましょう、
ここまで読んでくださり ありがとうございました！

- サークル /ICBM
- 発行者/会帆、四季ノ香、八月一日宮
- HP/http://cmpanus.blog68.fc2.com/
- 題/東方妖恋談 弐
- 印刷/ 有限会社ねこのしっぽ 様
- 発刊/2010/8/14



東方project fan book

R-18